様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2018
課題番号：２６３７０４９５

研究課題名（和文）仏語圏アフリカ諸国におけるアフリカ諸言語の書記言語としての発展状況に関する研究

研究課題名（英文）study on the state of development of African languages as written languages in Francophone African countries

研究代表者
砂野　幸稔（Sunano, Yukitoshi）

熊本県立大学・文学部・教授

研究者番号：６０１８７７９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、仏語圏アフリカ諸国におけるアフリカ諸言語の書記言語としての使用が、識字活動のための文字化と識字テキストとしての民話などの出版を除けば、現在も非常に限られたものにとどまっていることを明らかにした。独立前からウォロフ語を書記言語として整備しようとする動きのあったセネガルで、文学作品の出版など若干の進展が見られるが、まだ一握りの知識人の活動にとどまっている。
他方、印刷物よりもアクセスが容易なインターネット上のアフリカ諸言語によるサイトにも注目した。ウォロフ語など少数の言語について2000年代以降ある程度活発な動きが見られ、将来に向けて大きな可能性を秘めていることを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
フランス語圏アフリカ諸国では、フランス語が事実上唯一の公用語だが、本研究は、フランス語の普及が限定されているなかで、大多数の人々が理解するアフリカ諸言語の書記化によって知識と情報の伝達を行うことの重要性に注目した。調査の結果、独立後60年に達する現在も、度重なる政策宣言にもかかわらず、文学作品などの出版を除けば、教育、出版の領域ではアフリカ諸言語の使用に大きな進展が見られないことを確認する一方で、2000年代以降、インターネットなど新しい文化媒体の活用が、アフリカ諸言語の書記言語としての使用に新たな可能性を開きつつあることを示した。

研究成果の概要（英文）：This study showed that the use of African languages as written languages is still very limited in francophone African states, except for the publication of post-literacy reading materials. In Senegal, where there was a movement to develop the Wolof language as a written language from the pre-indepence period, some progress has been made, such as the publication of literary works in Wolof. But it is still limited to a handful of intellectuals.
On the other hand, we also paid attention to internet sites in African languages which provide easier access than printed materials. We found that a few languages such as Wolof have been active to some extent on the internet since the 2000s, and pointed out that it has great potential for the development of African languages as written languages.

研究分野：アフリカ地域研究、多言語社会論

キーワード：フランス語圏アフリカ諸国　アフリカ諸言語　書記言語　書記化　ウォロフ語　インターネット　セネガル

１．研究開始当初の背景

アフリカの旧イギリス領植民地および旧ベルギー領植民地では、植民地支配下で主要なアフリカ諸言語の書記言語としての整備がある程度行われ、現在タンザニアで公用語として広く国民に普及しているスワヒリ語を筆頭として、教育やメディアで用いられているアフリカ諸言語が存在するが、旧フランス領植民地では、土着のアフリカ諸言語の書記言語としての整備はほとんど行われなかった。独立後もそうした状況は変わらず、近年にいたるまで、早くから必要性が説かれていたアフリカ諸言語の書記言語としての整備ははなはだ遅れていた。

しかし、近年、セネガルのウォロフ語の場合のように、一部の知識人による文学作品の出版やインターネット上での使用の例が見られるようになっており、仏語圏アフリカ諸国におけるアフリカ諸言語の書記言語としてしての発展状況にどのような変化が見られるのか、実態の把握を試みる。

２．研究の目的

本研究は、上記のように、土着のアフリカ諸言語の書記言語としての整備がほとんど行われなかった旧フランス領アフリカ諸国において、アフリカ諸言語の書記言語としての発展状況を、複数の異なった状況にある国々の教育言語政策、アフリカ諸言語による出版状況、フランス語知識人のアフリカ語シフトの動き、近年の ICT の普及などの政策外要件を含めて調査分析し、アフリカ諸言語の書記言語としての発展状況を明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

調査対象国を、すでに申請者による一定の研究蓄積のあるセネガル、マリ、モーリタニアと、先行研究がある程度存在し、申請者が複数の研究者とのコンタクトを持つカメルーンに限定し、現時点におけるアフリカ諸言語の書記言語としての整備と使用の状況について、文献資料、政府、国際機関等の統計資料を通じて基本的情報を把握するとともに、web 上のアフリカ諸言語の使用実態の調査、アフリカ諸言語による出版に関わる識字 NGO や各国の知識人の動向を調査し、協力関係にある各国の現地研究者との情報交換等も含め、より具体的な最新の情報を獲得する。

４．研究成果

(1) セネガルでは、1950 年代にすでにシェク・アンタ・ジョップがフランス語などの植民地宗主国言語に依存しないアフリカの主要言語による書記文化の形成の必要性を主張し、ウォロフ語を現代の科学文化を担い得る言語として整備する可能性を示しており、1970 年代にはフランス語作家のセンベーヌ・ウスマンを中心としてウォロフ語による雑誌発行の運動も行われていたが、少数の知識人による動きにとどまっていた。1990 年代になるとアフリカ諸言語による識字キャンペーンが展開されるのと相俟って、ウォロフ語をはじめとする主要なアフリカ諸言語による識字テキストなどの出版が行われるようになり、少数ながら一般書として詩集や短編小説が出版されるようになった。とくに 1992 年に出版されたマーム・ユヌス・ジェンの『第一夫人』、2003 年のブバカル・ボリス・ジョップの『猿の子たち』は、小説言語としてのウォロフ語を確立したものとして注目された。

しかし、注目すべきだと思われるのは、出版費用や流通の問題を抱える紙媒体の書籍よりも、2000 年代に入ってから飛躍的に増加しつつある web 上のさまざまなウォロフ語サイトである。かつて街の看板やチャットなどで見られたフランス語式綴り字によるものではなく、ウォロフ語正書法を用いたサイトが数多く見られるようになっている。

(2) マリは、独立後の一時期は、アフリカ諸言語による識字と書記言語としての使用について、旧フランス領アフリカ諸国の中ではもっとも先進的であったが、その後の政治的混乱のため、長く停滞の時期が続いた。2001 年に当時のコナレ大統領によってアフリカ諸言語の振興を目的としてアフリカ連合の機関として「アフリカ言語アカデミー」が創設されたが、マリの諸言語の振興については具体的な成果はほとんど見られない。2011 年のリビア内戦以降、マリの政情も不安定化し、西部のカイ市など一部都市でソニンケ語などの識字コンクールが行われているほかは、具体的な動きは確認できない。

(3) モーリタニアでは、公用語としての古典アラビア語も、植民地宗主国言語であり現在も行政、教育のなかで重要な位置を占めているフランス語も、ほとんどの人にとっては日常言語ではない。他方、人々の日常言語について見ると、多数派のアラブ・ベルベル（アマーズィーグ）系の言語であるハサニャ語は書かれない言語であり、政策的には古典アラビア語と同一言語とみなされているが、ハサニャ語話者にとって古典アラビア語は学校で習得しなければ理解が困難な言語である。プラール（フルフルデ／フルベ）語、ソニンケ語、ウォロフ語などの黒人系言語は、書記法は作られているが、初等教育での実験的使用を除けば、やはり口頭言語としてのみ存在している。

(4) カメルーンでは英語、フランス語の二公用語政策のもとで、書記言語としてはこれら二つの言語が圧倒的な位置を占め、口頭言語としては北部のフルフルデ語、南部のエウォンド語、ピジン英語などが比較的広範に共通語として用いられているが、書記言語としての使用は識字テキストなどを除いてほとんど見られない。

(5)インターネット上でも、ウォロフ語のサイトが比較的多く見られ、フルフルデ語、バマナカ

ン（バンバラ）語についてもいくつかのサイトが確認できた。それ以外の言語については確認できていない。一つの指標として wikipedia の各言語による項目数を見ると、2019 年 6 月現在、リストに挙げられている 340 言語のうち、ウォロフ語が 1216 項目で 248 位、バマナカン（バンバラ）語が 651 項目で 269 位、フルフルデ語が 229 項目で 290 位となっており、研究対象とした諸国の言語でリストに上がっている言語は他にない。ちなみにナイジェリアのヨルバ語は 31903 項目で 100 位である。
(6)フランス語圏アフリカ諸国におけるアフリカ諸言語の書記言語としての使用は、旧イギリス領アフリカ諸国の主要なアフリカ諸言語と比較すると、非常に限定されたものにとどまっているが、少なくともウォロフ語などいくつかの主要な言語については、少しずつだが着実に進展しており、今後の発展を継続して注視していきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 10 件）
① SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 7.Fatick, 『熊本県立大学文学部紀要』、査読有、Vol.25 No.78, 2019, 27-44
② SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaise 6.Bakel, 『熊本県立大学文学研究科論集』、査読有、第 11 号, 2018, 141-161
③ SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 5.Tambacounda, 『熊本県立大学文学部紀要』、査読有、Vol.24 No.77, 2018, 27-45
④ SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaise 4.Podor, 『熊本県立大学文学研究科論集』、査読有、第 10 号, 2017, 73-92
⑤ 砂野幸稔、「詩集『あふれ出る思い』が伝えるセネガル農村女性の声」、『スワヒリ＆アフリカ研究』、査読有、28 号、2017，21-40
⑥ SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 3.Saint-Louis, 『熊本県立大学文学部紀要』、査読有、Vol.23 No.76, 2017, 117-138
⑦ SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaise 2.Ziguinchor, 『熊本県立大学文学研究科論集』、査読有、第 9 号, 2016, 23-57
⑧ SUNANO Yukitoshi, Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 1.Dakar, 『熊本県立大学文学部紀要』、査読有、Vol.22 No.75, 2015, 77-109
⑨ SUNANO Yukitoshi, Comment les langues africaines des anciennes colonies françaises pourront-elles être réhabilitées? – Le cas du Sénégal,『熊本県立大学文学部紀要』、査読有、Vol.21 No.74, 2015, 1-13
⑩ 砂野幸稔、「文化翻訳のバイリンガリズム－複数言語のせめぎあいから」、『立命館言語文化研究』、査読有、第 26 巻第 2 号、2014, 65-74

〔学会発表〕（計２件）
① 砂野幸稔、「マーム・ユヌス・ジェン『アーウォ・ビ（第一夫人）』が語る価値」、2017 年 5 月 20 日、日本アフリカ学会第 54 回学術大会（於信州大学教育学部）
② 砂野幸稔、「識字詩集が伝えるセネガル農村女性の声」、2016 年 6 月 3 日、日本アフリカ学会第 53 回学術大会（於日本大学生物資源科学部）

〔図書〕（計 1 件）
① 砂野幸稔他、『世界の名前』、岩波新書、2016、243

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。